

佐倉市 教育センターだより Vol.7

平成17年9月30日発行／佐倉市教育センター／TEL. 043(486)2400 <http://www.city.sakura.lg.jp/kyoikucenter/index.htm>

佐倉市教育センター企画座談会

佐倉の教育を語る

「教育のまち佐倉の実現」～学びを楽しむ子どもの姿をめざして～

パネリスト 平 肇 佐倉市立根郷小学校長

荒井 誠 佐倉中央公民館長

内田 儀久 佐倉図書館長

コーディネーター 大野 尊史 佐倉市教育センター所長

※敬称略

大野 今日は、学校、公民館、図書館と教育機関で所属長をされている方々にお集まりいただきました。早速ですが、それぞれの立場からみた佐倉の教育の現状について、お話をいただきたいと思います。

■教育機関における教育の現状について

荒井 子どもの本質、可能性は昔と変わっていないと思います。今、公民館には保護者向けのプログラムがいくつかありますが、母親たちは自分の時間を確保し、子育ての時間と自分の時間を線引きをして子どもを育てていることがうかがえます。50代以上の世代が経験していない価値観をもった親に、どんなアクションを起こしたらいいかは、公民館の課題のひとつです。また、今、子育て中の親は知識も豊富なので、自分たちが行動しなければならないという意識をもてば、すぐに動いてくれると思いますが、公民館としてはその手立てについても悩んでいます。

平 社会にみられる子どものひずみが、わが子の明日にも起こりうるという危機感を、家庭にあってもらいたいのですが、そうでない状況も見られます。一方、子どもの人格形成において、知育に頼ることが子どもの将来の幸福につながると錯覚している保護者もいます。そこで、学校ではできるだけ、「集団で学ぶ」、「集団で創る」ことの喜びを踏まえた学習の形態を多く取り入れるようにしています。問題解決学習もそのひとつです。また、地域を基盤としたより体験的で具体的な学習も進めています。



内田 図書館では、「興味を持つ→本を読んでみる→何かを学びたい」という過程において、何ができるかを考えています。入学前から低学年の子どもを対象とした「おはなし会」には、毎回かなりのお子さんたちが参加しており、潜在的に子どもは本を「読む」、「聞く」ことが好きなのだと感じます。読むことに興味をもたせるきっかけづくり、読むことが楽しいと気づかせるきっかけづくりを考えていますが、その中で佐倉学を生かしたいと思っています。具体的には、子どもたちがいつでも佐倉学について調べができるような本を充実させること、つまり好きな時間に学べるという環境を作ることを考えています。

■教育機関の連携について

大野 現状についてお話をいただきましたが、「学びを楽しむ」ためには、各教育機関の連携も大切です。このことについて、ご意見を聞かせていただきたいと思います。

平 学習意欲が低下していると言われていますが、それは「学校で学習したことが使える」という喜びがないからではないでしょうか。学習したことを家庭で使えるようにすることを、保護者の方たちに話をしていますが、社会においても「学んだことが使える場」があるといいと思います。そこで公民館、図書館には、学んだことが使える場の提供という形で支援していただきたいと思います。内田館長が話されたように、図書館には「佐倉学を学びたい」という子どもの思いを受け入れる場になつ

て欲しいですし、公民館には学びを楽しむ場の提供やプログラムの工夫をお願いしたいです。逆に、「公民館で学んだことを学校で使える」、「図書館で学習したことを使って学校で使える」、つまり「社会で学んだことを学校で使える」という関係を大事にした相互の連携ができたらいいですね。「学んだことを使う」というのは、「学んだことを深める」ことにつながります。図書館や公民館が、より質の高い情報提供の場となるといいと思います。

内田 図書館からも、学校にアプローチをしてもいいのではないか、と思っています。1つには、佐倉学について知ってもらうきっかけづくりとして、「佐倉学の貸し



内田佐倉図書館長

出しパック」を考えています。単行本以外にも、地図や観光パンフレットなどが入った50冊程度の本のセットを作って学校に貸し出すというサ

ービスです。

もう1つは、佐倉学推薦図書について考えています。小学校、中学校、一般の部を設け、佐倉学選定図書委員に佐倉学を学ぶのにふさわしい本を推薦してもらいます。子どもたちはその中の本を読んだらシールがもらえる、などという励みについても考えていきたいです。感想文を書いてみたい、という子どもがいたらそれを掲載する場を設けてもいいですね。

平 本校では、児童が佐倉学について調べた結果をまとめた本を図書室におき、全校で読めるようにしています。図書館にもおいていただけると、一般の人に読んでもらえる機会になり、「学んだことを使える」という場を提供していくことが連携のひとつになるのではないかと思います。図書館のように社会性な認知度の高いところでやることに価値があると思います。また、図書館からテーマを出してもらい、それを子どもたちが調べたり、調べ方を学ぶ場として図書館を利用することも可能だと思います。

荒井 公民館では、市民カレッジでパソコンを学んでいる人たちがいるので、彼らが本作りを手伝うこともできます。そういう作業を通して子どもと地域の人との関係づ

くりができるることはお互いによいことだと思います。

大野 図書館との連携の話がでましたが、公民館と学校、公民館と図書館の連携についてはいかがですか。

荒井 公民館には、学校と関わることができる人材や余地が十分にあります。学校の施設を利用したことをきっかけに、同窓生が部活動の子どもたちにトン汁を作り、交流をはかる等の関係作りをしているところもあります。施設を利用し、そのことが様々な面で発展していくという面においては連携が進んできています。次の段階として、その人たちの特技を学校教育の中で使えないか、と考えています。彼らは、子どもたちとの関わりの中で自分たちが役に立てる、という誇りをもってさらに新たなことに取り組めるようになると思います。

平 生涯学習というものは、本来学ぶだけでは続かないものです。学んだことが何らかの形で役に立つ、というサイクル型の学習形態が大切ではないでしょうか。本校では、公民館の寿大学のお年寄に学習活動への協力を依頼し、佐倉学の学習活動も進めています。

大野 公民館としての実践例は、どのようなものがありますか。

荒井 白銀小のパソコン室を借りて、佐倉地区内の4つの小学校に児童の参加を呼びかけ、子どもパソコン教室を開催し、お絵かき等を行いました。しかし、学校や家庭で学んでいる技術や知識がわからない中で進めましたので、活動を進めるには学校と公民館と情報の共有化が大切だと感じました。

内田 少し古い話になりますが、私が中央公民館にいたときに、佐倉小の児童がグループごとに民話を発表し合うという学習があり、その成果を中央公民館で行っている市民カレッジで発表がありました。好評でしたが、実施する前に何度も打ち合わせをしました。

平 打ち合わせを

しっかりやることは大切ですね。先ほどどの付け加えになりますが、公民館でぜひやって欲しいことのひとつに、学校で学んだことの発展的学習



平根郷小学校長

活動があります。例えば小学校六年生で江戸時代の学習

をしたときに、兜や鎧を身に付けてみたい、という子どもたちの要望にこたえるための体験的な学習を学校で行うとなると大変な時間がかかります。しかし、公民館で「昔の服装体験学習」といったイベントを開催したり、長いスパンで体験できるようなプログラムがあると子どもたちの学びが発展します。実際、公民館は身近にありますから。学校から公民館に協力を依頼する場面が、もっとあってもいいと思います。

大野 私も学校にいるときに、もう少し公民館と話をする機会をもてればよかったと反省しています。また、それぞれでカリキュラムをたてているので、もっと情報交換やすりあわせをしてもいいと思います。

荒井 今の時代、

一つの課題に対して分野を超えた専門家が解決するための知恵を出し合う時代にきていると思うので、そういう場を設定することはよいことだと思います。何より公民館、学校が、それぞれの役割を理解することからスタートすることが大切でしょう。

大野 今までお互いに話し合う場はありましたか。

荒井 管理者同士の話し合いの結果が一致しても、実務者同士となるとうまくいかないのが現状ですね。

内田 市民カレッジの「ふるさと歴史コース」の授業に、「歴史を学ぶ」という学習があります。そこで高齢者が「子どもたちに語る」、子どもたちは「高齢者から話を聞く」、つまり「聴き方を学ぶ」というプログラムがありました。とてもよかったです。そのときは、コーディネーターを入れて足りないところは補足するなど、コミュニケーションを円滑にしていました。

平 学校においては、校長には職員にきちんと理解させる指導力が、そして担当者にはそれを咀嚼する能力が必要だと感じます。

内田 子どもたちが夏休みの宿題について相談にくるときに、具体的に何を調べたいのか聞くと、子どもたちは答えられないことがあります。学校でもう少し具体的に指導していただけといいですね。



荒井佐倉公民館長

荒井 公民館でも同じです。施設見学で、公民館に来ても何について質問したらいいかわからないということがあります。

大野 見学の目的やねらいが明らかにされていない、ということが言えますね。

平 恥ずかしい話ですが、一人ひとりの課題を明確にしてあげるという、学校教育の指導の基本が、不足しているのだと思います。

大野 お二人の館長の話を聞いていると、学校の指導力の側面に触っていますが、学校としてはいかがですか。

平 学校は、これから社会のいろいろな教育機関、施設の特性を正確につかんだプログラムの作成をする必要があります。一方、公民館や図書館などの教育機関には、学校の教材、学校のニーズについての情報を学校から得ながら、学びの環境を整えていただきたいと思います。

大野 荒井館長のお話の中で、担当者レベルでつまずく、ということが気になりましたが、お互い情報を交換しあうことについてはいかがですか。

荒井 お互いが忙しいから、と遠慮したり、気を遣ってしまっているのかもしれません。

大野 極力機会を見つけて、お互いに行き来するようにするといいですね。管理職以外の職員も積極的に足を運んで話しをし、交流しあうといいと思います。その一つに、校長や公民館長、図書館長が話し合う場の設定も必要なかもしれません。

荒井 例えば通学合宿の実施にあたり、学校としてどのようなプログラムを組み子どもたちを指導をしているのか等、学校で協力してくれると助かります。

大野 それぞれの機関で、効果的な活動内容があると思いますので、さらに一步進んだプログラム、カリキュラムなどにおいても情報交換があるといいと思います。忙しい中、情報交流、人的交流を持つことは大変だと思いますが、教育センターとしても協力していきたいと思います。今日は、お忙しい中ありがとうございました。



大野教育センター所長

家庭教育に関する調査

1 家庭教育に関する調査について

家庭は、児童生徒が成長するための基盤であり、子どもにとって社会生活に必要な基本的生活習慣を身につけ、人間形成の基礎を養う大切な場所である。家庭で行われる教育は、保護者が子どもに行う意図的、あるいは無意図的な教育すべてを含めて家庭教育と考えられる。家庭教育は、子どもが将来にわたって、主体的・創造的に生き、未来を切り拓くたくましい人間の育成を目指し、生涯にわたり学び続ける力を身につけさせることの原点でもある。

しかしながら、近年、情報化、国際化、少子高齢化などの進展、核家族化など、子どもをとりまく家庭・社会環境は、大きく変化している。家庭では、世代間の触れ合いにより自然になっていた教育も質的に変化している。また、職業をもつ女性の割合が増大し、少子化、晩婚化が進んでいる。さらに父親の家庭における存在感の希薄化なども呼ばれているところである。

このような状況の下、佐倉市の家庭及び家庭教育の現状、保護者の考え方を理解し、学校における教育の指導の資料と共に、行政や学校はどのような支援をしていくべきかを考えるために、平成17年1月11日から1月20日まで、市内幼稚園2校（市立1校・私立1校）、小学校4校、中学校2校の保護者に家庭教育についての調査を行った。この調査結果の特徴的な設問についての考察及び総合的な考察を述べる。

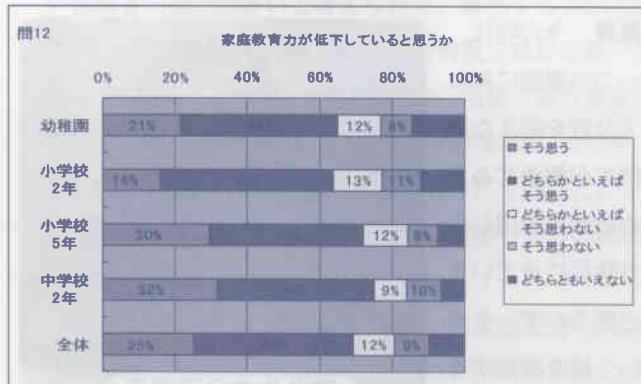
2 特徴的な設問についての考察

家庭教育に関する意識・認識では、約7割の保護者が、家庭教育は低下していると考えている。（グラフ1参照）理由としては、「根気強さ忍耐強さ、意志の強さに欠けること」や「あいさつなど規則正しい生活ができない」、「言葉遣いが悪い」などをあげている。この設問は、子どもたちの様子から親に回答してもらったが、子どもの教育をしているのは、大人である。したがって、社会全体のモラルが問われていると考えてよい。その社会のモラルの低下の理由として、「個人の利害得失を優先させる」「責任感の欠如」「物質的な価値や快樂を優先すること」「社会をよりよくしていくとする真摯な努力の軽視」「利便性効率性の重視」の5つが中教審答申「新しい時代を拓くために」であげられている。この観点は、今後の施策を行う上で留意していく必要がある。

一方で、今後の社会で家庭教育の役割は益々重要にな

ると考えている保護者は、9割以上である。ほとんどの保護者がその重要性を認識している。（グラフ2参照）その理由は、「子どもの人格を作る上で大きな影響を与える」という点をとらえているなど、佐倉市の保護者は、家庭教育の役割についての認識が高い保護者が多いといえる。

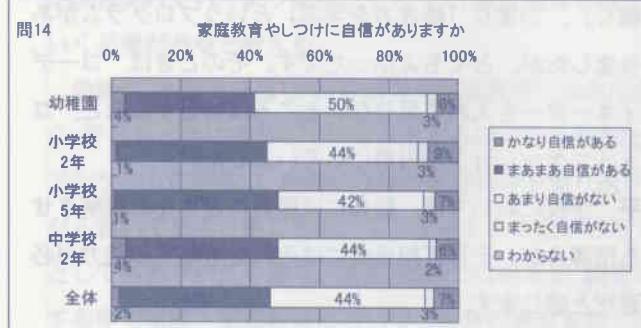
またその反面、家庭教育やしつけに自信のない親が約半数おり、自信がもてない親が多くいる。（グラフ3参照）厚生労働省の平成11年社会福祉行政業務報告や内閣府が行った社会意識調査と比較すると、家庭教育に自（グラフ1）



（グラフ2）



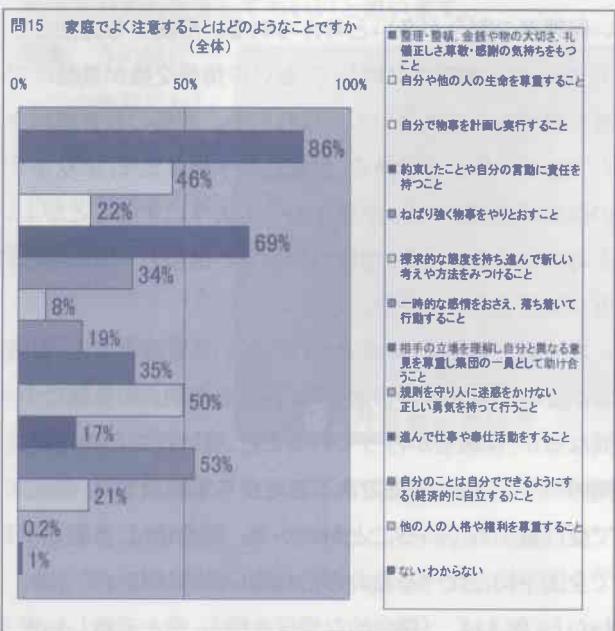
（グラフ3）



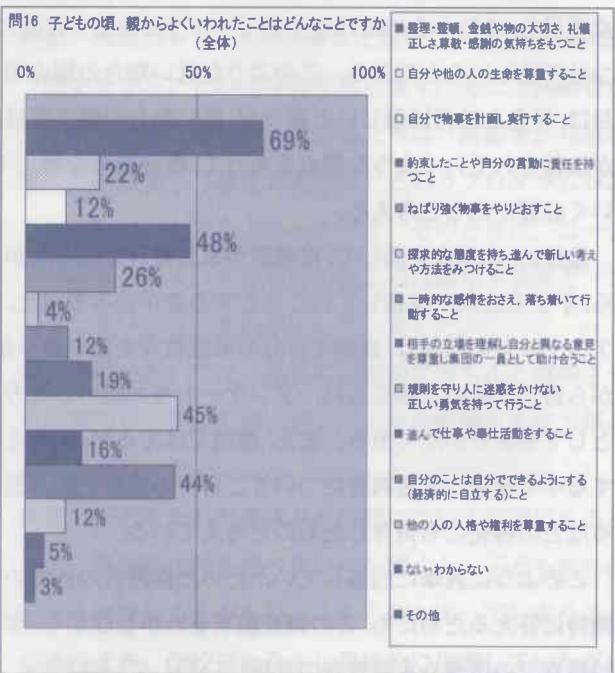
信のないと答えた保護者の割合が高い。このことは、家庭教育の養育態度をあわせて考えると、価値観が多様化する変化の大きい社会のなかで、親も迷いながらも、自分自身を反省しながら、一生懸命家庭教育を行っているからであろうと推測される。

「家庭でよく注意することは何ですか」という親が家庭で行なっている教育に関する設問は、家庭生活において網羅的な観点から回答をとったが、「整理整頓や礼儀正しさ、尊敬感謝の気持ちを持つこと」の基本的生活習慣に関することが一番多く86%だった。(グラフ4参照)どの観点項目も大切なものばかりであり、自分や他人の生命を大切にする事が46%など多い方であるが、この数値でよいということでもない。ただし内閣府政府広報室が行った「家庭教育に関する世論調査」で、

(グラフ4)



(グラフ5)



幼児期の子どもを持つ保護者に、「大切だと思うこと」として取った統計と比較すると、自主性の項目を除いては、佐倉市の保護者が全国平均より高い数値となっている。また、親からよくいわれた事と比較すると親からよくいわれた事が各項目の割合の数値は低いが、グラフの形状が似ている。(グラフ4、グラフ5参照)この問15、問16は、どの学年をみてもグラフの形状がよく似ているところに大きな特徴がある。(総合考察にも記述)

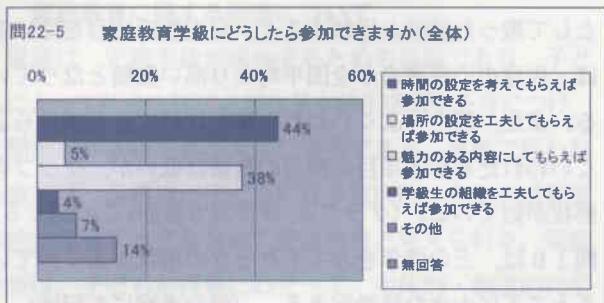
家庭教育に関する講座や学校で行われている家庭教育学級に関する設問の結果について述べる。公民館や学校で開催されている家庭教育に関する講座の参加は、3割で決して多くはないが、「内容がとてもよかったです。今後も続けて欲しい。」という記述も数件あった。公民館での家庭教育に関する支援は、今後も必要であると考えられるが、内容面での工夫が必要であろう。講師が一方的に講義をするのではなく、実践を持ちよったり、話し合いをしたり、具体的なシミュレーションを取り入れたトレーニングなど参加・体験型の学習の手法を用いた講座にさらに力を入れるべきであろう。

保護者が行政に求める支援としては、「情報の提供」「相談体制の整備」をあげる回答の割合が多かった。原因としては、核家族化による家庭教育の相談者として親を支援する人が、近くにいない場合が多いことがあげられる。この割合は、内閣府が行った同じ内容の調査の約2倍の割合に当たる。行政の支援として考えていかなければならぬ事のひとつであろう。佐倉市ヤングプラザに家庭教育の電話相談があるが、そのことを知らない保護者も多いのではないか。相談窓口に関する広報も必要であろう。

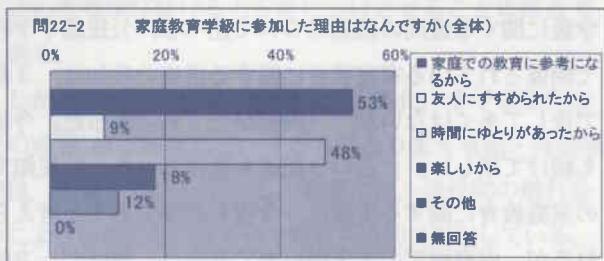
家庭教育の情報の入手は、「学校・教師」が多かった。このことから情報発信機能として「学校・教師」が期待されていることがわかる。しかし、反面「学校には聞きにくい。」という意見もあった。なんらかの、理由で学校には聞きづらい方もいると思われる。そのような方も気軽に情報を入手できる場、あるいは場の紹介が必要である。

学校で行われる家庭教育学級への参加経験は、約4割である。(グラフ6参照)社会教育施設で行う講座よりもやや高い割合となっている。参加理由は、「家庭教育の参考になる」と「時間の余裕があること」が多い。(グラフ7参照)時間の余裕があり家庭教育の参考になることであれば参加するということであろう。

(グラフ6)



(グラフ7)



有用であった内容は、学年ごとにばらつきがあった。幼稚園では、「しつけの話」が多く、小学校は「体験的な学習」中学校は、「いじめ問題・人権問題」が多かつた。このことから、各学年代において要求課題が異なる事がわかる。不参加の理由は、「時間がとれない」の割合が大きい。次に「興味関心がなかった」の割合が大きい。ではどうしたら家庭教育学級に参加できるかの質問に対しては、「時間の設定」と「魅力ある内容」の割合が大きい。(グラフ8参照)

(グラフ8)



以上の事から考えると、家庭教育学級に求められることは、学級の対象を年代で区切り、共通の課題意識がある学級をつくり、魅力ある内容をしていくことであり、このことが参加率を高める事になると考えられる。さらにただ単に、体験的な学習だけを行うのではなく、家庭教育の内容にも入れていく必要がある。たとえば、フラワーアレンジメントの講座をする場合、講師を地域の家庭教育について見識の高いかたにお願いし、体験的な学習とともに、家庭教育に関するノウハウを教えてもらう

ようにする。また、地域で会ったときも気軽に相談できる人間関係作りともなる。このような工夫をすれば、家庭教育学級の質も向上するのではないか。

3 総合的な考察

本調査を総合的に分析・考察した二点を述べる。

まず第一に、佐倉市の家庭では、子どもとの会話やコミュニケーションをよくとりながら、しつけなどの家庭教育もよく行っている。にもかかわらず、家庭教育に自信がもてない保護者が多い。これは、佐倉市の保護者が家庭教育において、高い目標を設定しているために、自信が持てない保護者の割合が多いと考えられる。解決する方法として、自分の家庭教育に関して、互いの情報交換が気軽にできる場がもてればよいのではないか。同様の教育課題をもつものの集まりである、家庭教育学級などで、より多くの保護者が、横のつながりをもてるようになるとよいとおもわれる。また、地域の教育力の活用も一つの解決に近づく手立てとなろう。

次に第二として、保護者が行っている家庭教育と、保護者が受けた家庭教育の調査で、各観点の割合の数値は少々異なるが、保護者が行っていること、受けたことの各観点間のバランスが、同様であることから家庭教育は、世代間で受け継がれていることがわかる。佐倉市は、各観点項目で全国平均と比べるとおおむね高い割合になっている。しかし、例えば、「探求的な態度を持ち、進んで新しい考え方や方法をみつけること」は低い割合となっていが、この観点項目も、これから時代を生きていく子どもたちに身につけて欲しいことである。このような低い割合の観点項目は、早急な改善は難しいと思うが、低い割合の観点項目が改善されていくような視点をもって、教育施策を考えいく必要があると考える。

最後に、本調査を通して、保護者が家庭教育に悩みながら、子どもと共に成長していく姿が読み取れた。アンケートの回答は、真剣に自分の家庭教育を振り返りながら書いてあると感じられ、アンケートをお願いした方としてもありがたく思う。また、僭越ではあるが、調査をする中で家庭・家庭教育についてご自身の家庭を振り返るなどの啓発にも寄与したものと考えている。

このように真摯に回答していただいた保護者の皆様の期待に答えるためにも、この調査結果をいかしながら、学校教育での指導や家庭教育の支援にいかしていきたい。

(沼田 正信)

佐倉学



小1年～3年用【堀田正睦】 【堀田正倫】 をどう活用したか

子どもたちに佐倉市民としての誇りと自覚を持たせ、将来への夢と希望を抱かせることを願い、「佐倉市郷土の先覚者」シリーズの中から、佐倉藩の殿様【堀田正睦】、そして佐倉藩最後の殿様【堀田正倫】を取り上げ、1年生から利用できる伝記を作成したことを前号でお知らせしました。この伝記は、各小学校に40部ずつ配布しましたが、読ませる時間、読ませ方などそれぞれの先生方で工夫してくれるようお願いしました。

その1

夏休みに入る前、寺崎小学校の2年生担任の大谷早苗先生から次の様なお手紙を戴きました。

『—— 略 ——

先生と若名先生の書かれた「堀田正睦」とても分かりやすくしかもやさしく書かれており、早速読ませてもらいました。カラーでとても親しみやすい挿絵が、子ども達にもよろこばれそうです。私は次のようなことでこの本を使わせてもらいました。

私の学校では、全校遠足で城址公園に行くことになりました。これをきっかけとして「佐倉のお殿様の本を読もう」と、児童に呼びかけ、朝の10分間読書の時間に全員で読むことにしました。本を手にした子供達からは挿絵がきれいとか、上手とかいろいろ出ました。最初は自分で読んでいましたが、「藩って何?」、「いつごろの昔のこと?」子ども達の声が聞こえてきましたので、

「国語の時間に、もう一度勉強しましょう。」
といって、その時間を終えました。（この時は、全員が読み終わりませんでした。）

その日の国語の時間に、時代背景や難しい言葉などを説明しながら、ゆっくりと読み聞かせていました。時代的にはNHK大河ドラマ「新撰組」を見ていた児童もあり、子どもなりにイメージを持つことが出来たようです。映像の力は、大きいですね。「順天堂」も現在の医院に行ったことがある児童もあり、また、順天堂大学のいろいろな体育部門での選手の活躍で、この言葉は、多



くの児童が馴染んでいたようです。読み聞かせの後、簡単な感想を聞きました。「佐倉の殿様はとっても偉い殿様だったんだね。」、「佐倉にそんな殿様がいたなんて始めて知った。」などという声が聞かれました。

この本をしばらく教室に置き、朝の10分間読書の時間に読むようにすすめました。概ねの児童がもう一度読み直していました。

後日、「佐倉のお殿様堀田正睦に手紙を書こう。」ということで、手紙を書きました。

まさよしさんへ
あなたはさくらほんのえらいとの
さまだつたんですね。
はんの人たちが、きるものやた
べものがないとき、せんとうにた
つてよくしてくれたのですね。み
んなのあれていた心は、おかげで
なおり、新しいきぼうがわいてき
てよかつたです。
さくらは、むかしからえらい人
がいたり、よいところです。わた
しはさくらがだいすきです。

A子さんの手紙の一部です。

佐倉城址公園への遠足も、とても有意義に終わりました。

私にとっては、とてもうれしいお手紙でした。

その2

1学期の終わりに近いある日、王子台小学校の6年生の皆さんと「市内めぐり」にご一緒する機会を得ました。綿密な計画と児童の事前研究に感心しました。

担任の長谷川元子先生と郷田教一先生のお話では、甚大寺や堀田邸を訪ねるにあたり、低学年用の「堀田正睦」「堀田正倫」を徹底して読ませたそうです。「低学年用で……」と恐縮していましたが、何年生でも結構です。活用してくださったことに感謝します。

先生方の活用例をお知らせ頂ければ幸いです。

(渡部 八重子)

佐倉学カリキュラム開発現地研修会

—歴博再発見—

1 研修概要

本年度の「佐倉学カリキュラム開発現地研修会」は、教務主任等37名の先生方の参加を得て、国立歴史民俗博物館の久留島浩先生を講師に迎え、7月26日（火）に実施しました。

従来、社会科を中心に行われていた歴博の利用ですが、新たに様々な教科等での利用の可能性を探ることを目標に、今回の研修は「歴博再発見」をテーマとしました。そのため、先生方には新たな発想で歴博の展示を見直し、様々な教科等の視点から、どんな活用が可能か事前に考え、問題意識を持って参加していただきました。久留島先生のガイダンスを受けた後、まず2グループに分かれ研修しました。

一方は、「地下ゾーンの見学」です。理科との融合で歴博をとらえることも可能ではないかという意図での研修でした。炭素年代測定法等、最新の技術による試料の成分分析の仕方を見学したこと、歴史と自然科学との融合や、理科系研究者と歴史系研究者の協力によってより確かな研究成果を得ているという、歴博の新たな一面を知ることができました。

もう一方は「企画展示室のワークショップ」です。縄文時代の低湿地遺跡から発掘された竹やつる製の編み物と同じ編み方で作品を作る体験も行いました。展示資料



縄文時代の編み方を用いた作品作りの様子

を図工・美術の観点からとらえることも可能ではないかという意図での研修でした。実際に

参加された先生方からも、児童生徒の図工・美術の活動にぜひ生かしたいという声がありました。

続いて、歴博を自校の「佐倉学」にどのように活用できるかを考えながら展示室での資料収集を行いました。

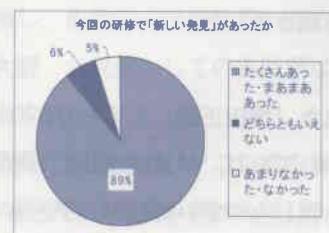


カリキュラム構想の発表の様子

この研修は、デジタルカメラで撮影した画像を基に「佐倉学」カリキュラムの構想を立て、発表するという手法をとりました。児童生徒の学習と同様に問題解決型のスタイルで、発見の過程を重視した研修を行った結果、これまでの社会科中心の歴博利用から、理科や図工・美術、生活、総合など様々な教科等での歴博利用の可能性を探ることができたと考えます。

2 アンケートより

今回の研修で新しい発見が「たくさんあった・まあまああった」との回答は89%でした。参加した先生方夫々に大きな成果があったことと思います。研修会で考えた



「佐倉学」のカリキュラム構想を、今後の授業に活用していくことについて参加者のご意見の一部を紹介します。

- ・見学の視点をきちんと絞込むことや、他教科との関連性を見出すことなど、新しい発見があった。
- ・テーマを決めた見学学習や出張授業など、歴博との連携をさらに図っていきたい。
- ・佐倉にある歴博が、自分たちの自慢になるように、さらに研究を進めていきたい。
- ・歴博の活用の仕方についてさらに研究していきたい。

3まとめ

今回の研修を通して、「佐倉学」と歴博を幅広く結びつける新たな視点を見出すことができました。今後も各校で研究を進め、また検討を重ねていただきながら「佐倉学」の新しいカリキュラム構想を立て、授業に活用していただければ幸いです。

（西村隆徳）

編集後記

夏季休業が終わり、それぞれの学校、個人等で多くの研修を積まれたことだと思います。教育委員会主催の研修会にも多くの先生方のご参加、ご協力をいただきありがとうございました。どの研修会も充実したものになり、佐倉市の先生方の意識の高さがうかがえました。研修をはじめ、有益な経験がさまざまな教育活動に生かされ、児童生徒に還元されることだと思います。児童生徒一人ひとりが生き生きと活動できることをめざして、佐倉の教育がさらに向上していくことを願っております。

（前林）